

浮殿（和間神社）

浮殿（浮いている御殿）は宇佐神宮の小さな摂社で、最初は和間浜に建てられ、潮が満ちると波間に浮かんでいるように見えました。19世紀に宇佐で干拓が行われたため、海岸線が移動し、現在の神社は寄藻川のほとりにあります。しかし、今でも、支柱の上にある朱色の本殿は水の上に浮かんでいるかのようです。元々は和間浜にあったことから、浮殿の正式な名前は和間神社です。

浮殿は、宇佐神宮が毎年行う放生会（生き物を解放する儀式）のための神社として、8世紀半ばに建てられました。この儀式は、720年代の隼人の乱の際に征服された九州南部の民族である隼人への殺生の罪を贖うために開催される儀式です。現在、放生会は、秋に行われる3日間の仲秋祭の一環として続けられています。初日には、八幡神は大行列を伴った持ち運べる社（神輿）で、上宮（上の社）から浮殿まで運ばれます。次の日、本殿で神職や僧侶が浄化の儀式を行った後、生まれ変わった隼人の魂を象徴するカワニナやハマグリが川に放されます。

かつて、浮殿はいくつかの社殿があるもっと大きな神社でしたが、境内は徐々に縮小し、今は本殿と拝殿だけが残っています。しかしその時代でも、九州地域を治めていた大名たちからの資金提供によって何度か修復が行われるほど、浮殿は重要視されていました。現在の浮殿は、1938年に再建され、1964年に修理されました。